
春夏冬って「商い」って読むんじゃ無いの？

漣夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春夏冬つて「商い」つて読むんじゃ無いの？

【Nコード】

N7548T

【作者名】

漣夜

【あらすじ】

あまり勘違い成分が含まれて居ないので、勘違いな題名にしてみました…

一番の勘違いは作者が調子に乗って更新してる事です。

あらすじとしましては、ダメ人間がファンタジーな異世界に行つて、特に何も考えず、知ろつともせず、ダラダラと過ごすつてだけの話だったりします。

流し読みでも、5分程度は潰せると思いますので、暇死しそうな時にでもご賞味頂ければ幸いです。ごぜえますだ。

い。
作者が長期休暇を勝手に取る事が判明致しました、ご注意ください

最終話（前書き）

勢いで再び投稿した、後悔はしていない、と思う…

最終話

ゴゴゴゴゴゴ…！！！！

大地に響く振動　徐々に、しかし確実に近づく気配
俺は走りながら回避の準備を整えた

ズドンッ！

足元に気配を察知し、横に跳ねて緊急回避すると同時に
先ほど迄、俺の居た場所には醜悪な化物が生えていた

人の身の丈を遥かに超える、見るもおぞましい巨大過ぎるミミズ
ジャイアントワームと命名しよう

何この気持ちの悪い生き物…

ミミズ自体は別に好きでも嫌いでも無い俺だが、コレは無理
不自然にデカイ時点でアウトなのに、何あの全身を覆う粘液
もう全てが無理、生理的に無理

そんな俺の思考は考慮して貰えず、ウネウネとうねったかと思うと
再びこちらに襲い掛かって来るジャイアントワーム（仮）
その攻撃をギリギリで回避し、再び逃走開始

助けてママン！と心の中で連呼しながら只管走り続ける
正直もうダメかもしれない…

人生の結末が巨大ミミズに喰われて終わりとかな不幸過ぎる
などと思っていると、前方に人影発見！

これは是非とも助けて頂かなければ！

それが無理なら、ジャイアントワーム（仮）をあの人影になすり付

けて身の安全を確保しなければ！
全力のダッシュで人影に近づき「へるぷみー！」と叫ぶ俺だった。

＼SIDE OUT＼

＼SIDE 人影（仮称）＼

おかしい、何時もなら既に魔物の四・五匹には遭遇している筈が
今日に限って一度も遭遇していない
それどころか、魔物の気配すら感じない
そして、とても嫌な予感がする

警戒を強め、周りを見渡していると突如背後から怒鳴り声と思わし
き声が聞こえ

あわてて振り向くと、こちらに駆け寄ってくる一人の男が見えた
年の頃は二十代半ばぐらいか、この辺りでは珍しい黒目黒髪

身長は170前後、馴染みの無い服装をした人物だ

その人物が発した言葉は私の知らない地方の言葉の様で理解が出来
ない

が、その表情から怒りと焦りは伺える

何をそんなに怒っているのか解らないといった私の表情に

男は言葉が通じていないと悟ったのか、身振り手振りで

ここは危険だ、早く逃げろと告げてきた

状況が掴めない私は男の後方に目をやると、大地を掻き分け迫り来
る魔物が見えた

「ゴルドバっ!？」

有り得ない、ゴルドバとは未だに人が足を踏み込めないでいる魔境

の近辺に生息する

騎士団の一個中隊で討伐にあたる魔物だ

それが、こんな人里の近くに現れるなど滅多にある事では無い

そして、今の状況は最悪と言っていていいだろう

たかが二人では討伐する事も逃走する事も叶わない

万が一逃げ果せても、近くの村や町に多大な被害を及ぼす事になる
私も栄誉ある騎士団の一員、無謀な戦いを挑む覚悟を決め腰に挿した剣を抜き放ち

通じないとは解っているが「貴方は逃げるんだ」と男に告げた。

すると男は優しくにこやかな表情で何かを告げ、私の肩を優しく押し逃げるように促してきた

そして、私との距離をとるため自分に魔物の注意を引き付け走り出した

襲い来るゴールドバを見事に紙一重でかわし、間合いを計る男の姿はまるで舞い踊るように美しく洗練されていた

しかし、男は丸腰であるため防戦一方になってしまっていた

このままでは何時かやられてしまう、そう思った私は騎士の誇りであるはずの剣を躊躇い無く投げ渡していた

男は振り向き様に危なげ無く剣をキャッチし、何事か叫ぶと（おそらく感謝の言葉であろう）

またもゴールドバの攻撃を見事なまでの紙一重で回避し、すれ違い様に一閃

ただの一太刀で胴体を一刀両断にしてしまった
それを見た私は

「美しい…」

と呟きただ呆然と立ち尽くした…

＼SIDE OUT＼

＼SIDE 俺（名前はまだ無い）＼

人影に近づくとその人物はなんと全身鎧のコスプレだった
色々と認めたく無い現実を突きつけられてる気がしなくも無いがス
ル―

そして、どうやら言葉が通じて無いっぽい
こっちは滅茶苦茶焦ってるんですけどっ！
何とか状況を伝えようと身振り手振りで

「ジャイアントワーム（仮）に襲われてる真っ最中なんです！
後ろからすっごい勢いで追いかけて来てるんで、何とかしてくだ
さい！」

と、説明すると何とか通じたのか俺の後ろに視線をやりジャイアン
トワーム（仮）を見つけ
「ゴルドバっ！！」

と、気合十分、殺る気十分に雄叫びをあげた
あ、声からして女の人だったのね 全身鎧のコスプレ（だと信じ込
みたい）でわからなかったわ

ついでにジャイアントワーム（仮）では無く、多分ゴルドバって名
前なのねあのミミズ

そんな事を考えているとコスプレさんが腰の剣（やっぱり本物？）
を威勢よく抜いた

カッコイイ！頼もしい！後は私に任せろ！って事ですネ？

俺は最高の笑顔で「後は宜しく！」と肩を叩き身の安全を最優先し
て逃走を再開した

までは良かった、人として褒められた行動では無いにしろ我が身が一番かわいいし…

しかし！ゴールドバがこっちに向かって来てるじゃありませんか！？やばい、これはやばい状況ですよ

何とかコスプレさんになすり付けられないかと、微妙な距離でギリッギリの回避を繰り返していると

ブオンツ！

と背後から剣が飛んできた！危なっ！！！！

とっさに身を守る為に突き出した右手に剣がすっぱり収まる

ゴールドバ目掛けて投げたんだろうけど、完全に俺にヒットする軌道でしたよ…

奇跡的に受け止めたからよかったけどもさ…

「ノーコンツ！」

咄嗟に非難の言葉を叫んでしまった俺は悪くないと思う、否 俺が悪いわけが無い

なんて思っていると、再び背後からゴールドバが襲い掛かってくる気配焦って振り向き様に緊急回避したら右手に嫌な感触

ズバンツ！！！！

あれえ？ゴールドバの胴と頭がお別れしちゃってますよ？（どこからが頭かわからんが）

偶然あたった剣で切れるなんて、意外と柔らかいのねゴールドバって後、粘液やら体液やらで汚れて滅茶苦茶ブルーなんですけど…

こっちをガン見してるコスプレさんが何事か呟いた

きつと「汚い…」とか言われたんだ…
更にブルーな気持ちになった…

そんな見た事も聞いた事もない場所で体験した不思議な一日でした。

最終話（後書き）

好きな作品の連載が止まっていたので、やっちゃいました！

まあ、無事次話が掲載されたようで一安心です

連載もので投稿したのは勢いとネタです

読み手も居ないのに連載する勇氣は御座いません…

二次元街道を迷走したい今日この頃、皆様いかがお過ごしでしょうか

犯人はマスター（前書き）

お気に入り登録してくれた方がいらっしやったので

このまま放置するのも気が引けるチキンな私は続きを書く事を決意
した！

が、即心が折れた…

まあ、言い訳の続きは後書きでも…

【重要な事を後回しにして誤魔化す詐欺の手法です。皆様注意しま
しょう。】

犯人はマスター

やあ！俺だよ！俺、俺！！！！

実は名前はあるんだけど、恥ずかしいので名乗らない俺だよ

まあ、現在進行形で理解不能の事体に陥ってるんだけど、あえて今は語らないでおこうと思う

それよりも、少し前の話をしよう

こんな状況に陥る前の話だ…

その日、俺は休日だった

まあ、毎日が休日な自由人なんだけども。

そんな事はどうでも良い話さ！

十代最後の年もそろそろ十年近い俺は、十代最後を満喫しようと思っ
起になっていたわけさ

多分それがいけなかった…

慣れない人込みを掻き分け、入った事も無い店に入ろうと思っ立ち
家の外へ出た瞬間！！！！

びっくりするぐらい太陽が眩しかった…

ま、久々のお日様だしね。

んで、普通に街へ繰り出したわけですよ
行くあても無いままに

当然の事フラッとどこかに入る事も無いままに…

そして、戦慄の夜が訪れた…

ぶつちやけ暗くなって、更に道が解らなくなったただけですが何か？

まさか、二十歳間近（十年近く遅れて）で迷子になるとは
心細いわ凹むわで、正直泣きそうです！

道行く人も居ない通りでは、道を探す事も出来ず…

途方に暮ながら歩いていると、ポツリと佇むお店の看板
希望の光に誘われ、道を探ねようと入店し

奥ゆかしい性格の俺は、撫し付けに道を探ねるようなまねは出来ず
とりあえず、店員さん（マスター？的な人？）に促されるまま、カ
ウンターに腰を据えた

「何になさいますか？」

何がですか？俺は道を探ねただけなんです…

「お客様は初めてのご来店ですね？

でしたら、私が何かオススメでもお出ししましょうか？」

オススメよりも帰り道を教えて頂きたいのですが…

そうは言えず…「じゃあ、ソレで。」と、言っちゃったオマセさん
な俺の馬鹿！

「では。」

「シャカシャカシャカシャカ」

「どうぞ、暗い気持ちを忘れさせる素敵ない時をお楽しみ下さい。」

うん、忘れちゃダメですよ？主に帰り道とか…

覚えて無い俺が言うのも何ですけど

まあ、このカクテル？を呑んだら道聞いて帰ろう…

で、何やかんやあってゴルドバ（推測）に遭遇したわけですよ！

え？何やかんやが大事って？

覚えて無いもんは知らん！！！！

犯人はマスター（後書き）

本当に申し訳無い。

続きなんて考えて無かったので、続けようにも何も思い浮かばなかったんです…

何とか続けれるように無理矢理方向性を模索中です…

さして重要でも無い【重要なお知らせ】（前書き）

くお知らせく

題名とジャンルに内容を偽る単語が含まれる事が判明致しましたので
この場を借りてお詫びさせて頂くと共に、修正は致しません。

さして重要でも無い【重要なお知らせ】

どうも、アキレスです。

え？誰って？

ゴルドバとコスプレさんに遭遇した不運なシャイボーイの俺だよ。

名前は、「ヒトトセ・アキレス」って言うんだよ。

最近流行りの親の悪乗りで、海外風の名前だから名乗りたく無かったのさ！

日本人の純血種だよ。

素敵ネームを漢字で書くと「春夏秋冬・春夏秋冬」だよ！
あら不思議！香ばしさ200%アップ！！

まあ、そんな事は今はどうでも良い事だ
それよりも今の状況に至るまでを箇条書きでおさらいしてから、今の話をしよう。

- ・あの後、コスプレさんに何やかんや言われるが理解出来ず
- ・付いて来いのなジェスチャーをされたので付いて行く（こんな場所にいるよりはマシと思い）
- ・石造りの城壁？に囲まれた街に到着
- ・検問？で、またも何やかんや言われる（もちろん理解出来ず無言を貫く）
- ・コスプレさんが間を取り持ち無事通過
- ・その後も黙って付いて行くとお城に連行されてる事に気付く
- ・身の危険を感じ、即逃走
- ・逃走中、路地裏で占い師っぽい奴に足止めを食らう
- ・またまた、何やかんや言われるが当然の如く理解不能
- ・突然、占い師がまじないを唱えだす（あまりの怪しさに俺どん引

き)

・俺の体が発光、身の危険を感じたもや逃走開始
・しかし、回り込まれた！↑今、ココ

「どうじゃ？言葉が理解出来るようになったじゃろう？」

「・・・」

「我はある男に頼まれて、お主がくるのを待つて居ったんじゃよ。」

「・・・」

「ココはお主が居た世界では無い、ココは（ベルファーク）と呼ばれる世界じゃ

冒険あり、魔法あり、魔物ちよつと多目のふぁんたじーな世界じゃよ。」

「・・・」

「お主は向こうの世界で生きる事に苦痛を感じて居ったじゃろ？
それをたまたま聞いたあ奴が、気まぐれにこちらに飛ばしてきおつたのじゃ。」

「・・・」

「別に使命も何も無いので安心するがよい、好きに生きると良いぞ。」

「・・・」

「まあ、いきなり右も左も解らず放り出すのも酷じゃろうからある程度の知識は我が教えてやろう。」

「…ハッ！？面倒臭そうだったから、妄想世界にトリップしてしまつてた…」

「わんもあぷりーず？」

「聞きしに勝るダメ人間っぷりじゃな…」

「あ奴もとんでもない奴を送り込んできおつたわ…」

呆れきつた態度を隠そうともせず、占い師は大きなため息を吐いたが根が善人なのだろうか、町外れの自分の家へアキレスを連れ帰り三日三晩かけ、ある程度の知識をアキレスに叩き込んだのだった…

さして重要でも無い【重要なお知らせ】（後書き）

はい、転生してません。

でも、勘違いも大して含まれてないし…

いずれ転生させれば、どうとでもなる！はず…

全てにおいてウダウダ感満載ですが、その「痛さ」を楽しんで頂ければ…

まあ、何にせよ

「無駄な時間を過ごさせてしまって申し訳無い。」

この一言に尽きる！

ある冒険者の話（前書き）

今日もウダウダとした話を投稿してみた
しかし、読み難いな…
読み易い書き方って何だ？

ある冒険者の話

その日もいつもの様にギルドへと足を運んだ。

最近上級者の仲間入りを果たし、ここのギルドではそこそこに顔が利く事もあり

報酬の良い高ランクの討伐系依頼を優先的に回して貰えるようになったのだ。

意気揚々とギルドの扉を開け、いつもの様に受付カウンターへ行こうとした俺だが

只ならぬプレッシャーを感じ、依頼ボードの方を振り返った。

そこには、二十代半ば程の男が一人、壁に背を預け佇んでいた。

何処を見るでも無く、周りを眺めるその視線は上位ドラゴン種のように鋭く威圧的だ

ギルド内に居る者達もそのプレッシャーに竦み上がってしまったている。

何者だろうか？

長くこのギルドには世話になっている俺だが、一度も見た事の無い男だ。

これ程の威圧感を持つ人物に出会って忘れる訳が無い。

強く興味を引かれた俺は、暫くその人物を観察する事にした。

決して短く無い時間、その場で微動だにしなかったが

数十分した頃に、壁から離れ依頼ボードの前へと歩き出した。

丁度、依頼ボードの前から人が居なくなったと同時にため

おそらく、手頃な依頼を探していた初心者達に気を遣ったのだろう。恐ろしい程のプレッシャーを放ってはいいるが、どうやら気遣いの出来る善人のようで安心した。

そして、一通り依頼ボードを眺めると、ため息を一つ吐きその場を

離れて行った。

それはそうだろう、依頼ボードに貼られている程度のクエストなどあの人物にとっては簡単過ぎるに決まっている。

だが、初めてのギルドでは、カウンターから直接クエストを回して貰うのも難しいと考えて

一応、依頼ボードを確認したのだろう。

結果、手頃な依頼は無かったようだが…

少し不憫に思い、思い切ってその人物に声をかけてみた。

「よう、新顔さん

手頃なクエストが見付からなかったようだな？」

男は振り向き、訝しげな表情でこちらを見た。

「あ、怪しいモンじゃ無いぞ

俺はルクスって者だが、ここではそこそこ顔がきくんた

良かったら、手頃な依頼が無いかカウンターに聞いてやるぞ？」

俺がそう伝えると、男は

「助かる、俺はアキレスと言う。」

とだけ、口にした。

それから、少しの間話しかけてみたが、相槌を打つ程度の返事しか得られなかった。

イメージ通り、寡黙な人物のようだ。

そして、カウンターに向かい受付嬢のレイチエルにいつもの様にクエストを見繕って貰ったが

パーティー系のクエストでは手頃なものが無かったので、ソロクエストを二つ斡旋して貰った。

片方の依頼用紙をアキレスに渡し

「また、何かあればいつでも声をかけてくれる程度の事なら力になるからな。」

と言い、俺は俺のクエストに向かった。

ある冒険者の話（後書き）

注）ルクスさんは女性です。

まあ、どうでも良い情報ですけどね

また出てくるかわかりませんし

先の見えない不安、他の作者の方々ってどうやって話し作ってるんだろ…？

プロットって美味しいのかな…？

ある日の話（前書き）

突如異世界に飛ばされた主人公が、その事について全く悩まないのは仕様です。
仕様です。
仕様です。

ある日の話

地獄の様な勉強会【三日三晩で一般常識覚えまSHOW】を何とか乗り越え

一日体を休めて、今日から仕事探した。

とりあえずは住民登録とかは不要らしいので安心したが
ギルドには登録しといた方が何かと便利らしいので
やってまいりました！冒険ギルド！

ファンタジーと言えばお約束の一つですなあ。

人気ゲーム【魔物狩人】の集会場つばい佇まいにちよつと感動
とりあえず入店？してカウンター内に立っているベッピンさんにギルド登録とやらをして貰う。

シャイボーイな俺はほとんど会話も出来ず、よく理解出来ない話にも頷き続け

最後に名前を伝えカードに記入して貰い終了。

いつまでもココに立ち尽くしても邪魔になるだけなので、依頼ボードとやらの近くに移動した。

さて、ここで問題発生

依頼の受け方がわかりません！

人に尋ねようにも、皆必死に依頼を吟味している様で、声をかけられない。

今更、さっきのベッピンさんに依頼の受け方を聞き直すのも恥ずかしいし

仕方が無いので、近くの壁に寄り掛かり、依頼の受け方を見て覚えようと考えた。

俺がガン見していると、視線に気付き人が振り向いた。

俺は勿論目を逸らした。

危ない危ない、ガン見は良くないよね！

って事で、ボヤーっと全体をガン見する事に決定。

しばらくそうして居ると、新たにお客さん？が入店して来たので、そっちもチラ見してみた。

うわっ、また全身鎧だ…

でも、この前のコスプレさんとは別人の様で安心した。

そう言えば、この前はトンズラかましてしまったけど、大丈夫なのかしら？

別に悪い事はしてないだろうし、見付かっても問題無いような気がするが

多少は面倒な事になりそうなので、近々別の町に移動しようかなあ、などと考えながら

視線を元に戻す。

あ、なるほど、気に入った依頼の書かれた紙を剥がしてカウンターに持って行くのね。

よし、依頼の受け方は理解した！

後は、空くのを待とう！人込みとか苦手だしね！

待つこと、15分程度…

やっと人が居なくなりました。

だが、うかうかしてられない、いつ第二派が来るやもしれん。

いそいそとボードの前に行き、依頼を見てみる…

読めません…

何？この字？どっからどこまでが一文字かも解らんわ！

は…っ…ため息しか出ないよママ…

仕方ない、占い師にでも頼んで楽に文字が理解出来る方法でも教えて貰うか…

と、占い師の家へ逆戻りしようと歩き出すと後ろから声をかけられた。

「よう、新顔さん

手頃なクエストが見付からなかったようだな？」

振り向くと全身鎧さん

何か俺に絡んでくる人は鎧やらローブやらで顔と体型がわからん人物ばかりだなおい

しかも、声からして全員女性のようなだが…

ファンタジーの女性装備と言えば、守る気の欠片も無いセクシー装備だろ！？

天地開闢からのお約束だろ！？

何でフルプレートアーマーでガッチガチやねん…

さっきまでボード前でたむろってた兄ちゃん達は普段着っぽい奴が大半だったのに…

せめて、タンクトップとホットパンツぐらいの装備に着替えて来いよ！

と非難の目を向けていると

「あ、怪しいモンじゃ無いぞ

俺はルクスって者だが、ここではそこそこ顔がきくんた

良かったら、手頃な依頼が無いかカウンターに聞いてやるぞ？」

あ、良い人だ。

若干さっきの考えが後ろめたくなり、小声で

「助かる、俺はアキレスと言う。」

と口にした。

それから、少しの間話をふってくれたのだが、恥かしがりやさんな俺は相槌をうつのが精一杯だった。

会話も一段落したので、二人でカウンターに向かったが

二人用の良い依頼が無いらしく、一人用の依頼を二個紹介して貰って片方を俺に譲ってくれた。

「また、何かあればいつでも声をかけてくれ
ある程度の事なら力になるからな。」

と言い残し、ルクスさんは颯爽とギルドを後にした。
かつけえ…よし！俺も真似して颯爽とギルドを後にしよう！

ある日の話（後書き）

なんやかんや、とか適当な感じで説明をすつ飛ばすのも仕様です。

仕様ったら仕様ですつてば。

更新停止かと思った頃に更新する妙技（前書き）

そろそろ、更新停止しようかと思ったら、お気に入りに入れて下さ
ってる方が増えてた…

引くに引けぬ男の性、今日もウダウダ更新。

でも、本当にこんな適当なの読んでる人居るのかしら…
うっかり押し間違いじゃ無くて？

後、注意事項。

【少々危険な単語が出てきますので、ご注意ください】

更新停止かと思つた頃に更新する妙技

ある一室で対峙する二つの人影

黒目黒髪の男が沈黙を貫く中、全てを覆い隠す様なロープを身に纏つた人物が口を開いた

「で？文字が読めないの、依頼内容も依頼主も解らないと申したいのじゃな？」

何とも間抜けな話にロープの人物はため息を漏らす。

「だって、仕方が無いのさ
何事にも失敗は付き物だし、初めてともなれば尚更だろ？」

ロープの人物は言い訳を聞くのも面倒と判断し、手短に説明してやる事にした。

「ココから大きな木が見えるであろう？そこには森が広がっておりますので

先ずは其処へ向かえ。

そこに着いたら、是を20個集めるのじゃ、以上。」

とだけ伝え、何かを男に投げよこした。

「おつとつと。」

男はソレを危な気満載で何とか受け取り

「OK、んじゃ集めたらココに戻ってくるわ。」

と言い残し、駆け出して行った。

それを無言で見送ったローブの人物は

「何の装備も無しでランゴスの森に向かう馬鹿はあ奴ぐらいのものじゃろうな

まあ、それほど心配せんでもよいか…」

安易に予想出来る不安な言葉を漏らすのだった…

「ランゴスの森（「気になる木の森」アキレス命名）」

で、受け取ったは良いが、コレは一体何だろうか？

何か針っぱいモノの根元に袋っぱいモノが付いてる物体X木の実？かな？

まあ、美味しくは無さそうだし興味も無い。

既に1個貰ったので、残り19個さつさと拾って帰ろう。にしても、落ちて無えなあ…？

落ちてるモノなのか？木に生ってるのか？

歩けども歩けども見つからん…

さつきから、虫の羽音も煩いし早く帰りにえなあ。

ブブブブブブブ…

羽音まじウザいなあ、アレ？羽音デカくな？そして多くな？
凄く嫌な予感がするんですが…

ブーン…

背後から羽音の接近を聞き、手で払う

ブチャッ！ビチャン！ブブツ…ブツ…ブ…

振り返ると其処にヤツが居た…

デッカイ蜂！人間の上半身ぐらいある蜂！

まあ、腰の部分から千切れ飛び、紫色の体液を撒き散らして絶命してるんですけどね。

キモい！！！！

そして、俺の利き手が大惨事！！！！

ベトベトするよあ、心なしが臭い気がするよあ…

凹みまくって、虫の死骸を見つめていると

あれ？あの針って…

間違い無い！！！！

コレが探し物じゃあ御座いませんか！！！！

キモさ満開だけど、ラッキ〜2個目ゲット〜

…ん？

って事は、後18匹殺せって事？

くそ弱いので、危険は無いにしろキモいわ！！！！

諦めて帰ろうかしら…

本気で悩んだ末に、帰る以外の選択肢が思いつかなかったので帰る事に決めました。

そう言えば、蜂って殺すと攻撃ホルモンやらが付着して襲われるんじゃない無かったっけ？

ヤッベ！とつとつとずらかるぜい

「うわぁ！ランゴスの群れだ！

やつらのテリトリーにも入って居ないのに凶暴化してるぞ！逃げろ！……」

遠くで叫び声が聞こえる…

俺のせいでは無いと信じよう

でも、ちよつと心配なので遠くから覗いてみようかな？

ちよつとだけ覗いて、問題無いのを確認してトンスラしよう、そうしよう。

更新停止かと思った頃に更新する妙技（後書き）

危険な単語の語尾に「タ」を付けるのは止めましょう。

危険度が跳ね上がります。

まあ、今回は言い訳はしません。

固有名称は思い付きで付けてるんですが「思いつかなかった」それだけです。

ちなみに、ミミズさんの名前も思い付きです。

スペインに怨みも何も無いのであしからず。

このタイミングでまさかの閑話（前書き）

流れとか空気とか読む気は御座いません。

え？ちよつとは読んだ方がいいですか？

まあ、続きが気になる程のモンじゃあ無いし別にいいか！
つて事で。

【注意】

汚い単語、嫌悪感を感じる表現が含まれている可能性が御座います。
用法・用量にご注意下さい。

このタイミングでまさかの閑話

「死ね死ね死ね死ねッ爆ぜろッ腐れッ千切れ飛べえええッ
塵屑！ビチ糞！皆死ね！ヒヤハハハハハハハハハハ！！！」

そこは正に地獄だった。

辺り一面、蟲、蟲、蟲。

大小様々、蜘蛛、百足、蛆、種類も様々

そして、その夥しい蟲の絨毯から僅かに見え隠れするものは
かつて人だったモノの一部。

そう、そこは正に地獄だった…

この大地【ベルファールゴ】は一つの大きな大陸と八つの島々からなる。

その大陸の中心に位置する、大陸の7割を占めるのが【魔境】と呼ばれる

人の踏み込めない、魔物の闊歩する未開の土地。

ソレをドーナツ状に囲む様に大陸の外周に五つの国々が存在する。

その中で、大陸の南に位置するのが【アレスト共和国】

他国との争いも少なく、魔物の侵攻も少ない最も豊かで恵まれた国である。

アキレスが飛ばされた場所でもある。

変わって、大陸の反対側、北に位置するのが【タルタロス帝国】

国名からも解る通り、皇帝が国を治めている。

皇帝の名は『ロス・カルマ・デル・タルタロス』と言い、暴帝と恐れられている人物である。

他国との争いも少なくとも無いが、何より【魔境】との攻防が多い激戦区として知られる。

その【タルタロス帝国】の北に位置する島【ソドム島】が今、一人の人物により地獄と化していた。

ソドム島は決して大きな島では無いが、小さいと言うわけでも無い。そして、島には要塞が一つ有り、そこがタルタロス帝国の軍事演習場となっている。

その要塞に突如として現れたのが、『ルビガ・エル・デ・クルーエ』と名乗る人物である。

その人物は、頭から足までを覆う紫を基調とした毒々しく派手なロブに身を包み

顔には道化の様なマスクを被っていた。

そして、砦の前に忽然と現れ

「ワタクシは『ルビガ・エル・デ・クルーエ』と申します。

以後お見知りおき…の必要は御座いマセン。

この砦は頂きます。手前エラノ糞ミタイな命も頂きます。

ワタクシの可愛い可愛い蟲達の『餌』に『苗床』に『慰み』になれる事を光栄に思つて

死に絶えてクダサイマセ。」

と言い放ち、空に浮かび上がるとローブを広げた。

すると、そのローブの隙間から様々な蟲達が蠢き、這い出してきた。

蟲達は一斉に砦へと押し寄せ、柵を、門を、防壁を、そして人を一斉に食い荒らし始めた。

そこから地獄の始まりだった。

殺せども、殺せども、無限とも思える勢いで湧き出る蟲達。

徐々に、しかし確実に喰われ絶えて行く兵士達。

夥しい蟲達に囲まれ、逃げる事もかなわず…

たった数時間でソドムの要塞は陥落し、残されたのは朽ちた要塞と、
かつて人だったモノ

そして、耳障りな蟲の羽音と鳴き声と

狂気に満ちた、一つの晒い声だけだった…

このタイピングでまさかの閑話（後書き）

え？

別に伏線とかじゃ御座いませんよ？

後々絡んで来る予定も御座いませんし…

何となく書いただけさ！

あ、そうそう、話は戻るけど…（前書き）

前の話が不評そうで怖い…

でも、後悔はしていない。人生勢いですよね！

まあ、ヒッソリ細々やってるので大して人目にも付かないでしょうし
苦情やら評価やらはおそらく来ないでしょう。

ってわけで、これから、自己満足でダラダラやってきます！

こんなんでも申し訳無いですが、読んで下さった方々に最大級の感謝
を

あ、そうそう、話は戻るけど…

森の木陰からコツソリ覗いて見ると

もう、面白いぐらい見事に蜂に囲まれてる集団発見！

20匹ぐらいに囲まれて、見てて可哀相なぐらい取り乱してます。

まあ、何か一人だけ必死に周りに指示を出してるオッサンが居ますがね。

「落ち着け！」とか「隊列を組め！」とか叫んでますが、全然周りの人達に伝わってませんなあ。

お？オッサンが単身で前へ出たぞ？殺る気か？そのどデカイ斧でオッサン無双するのかな？

楽しみですなあ、ベルファールゴに来てから未だ「戦闘」なるモノにお目に掛かった事が無いしね。

重そうな斧を横薙ぎに振りぬくオッサン！

…遅っ！！！効果音付けるなら「ブ…オオオオン…」ぐらいか。

余裕で避けられてますがな…

手加減してるのか、斧が重すぎるのか…

どっちにしろ小野サン（オッサン）勝つ気無えなあ。

周りの奴らの訓練か何かかしら？

もう暫く見学しましょかね？

- - 小野サン（仮称） - -

興奮状態のランゴスに囲まれるとは、何とも運の無い事だ。
今日はわしの所属する克蘭 -

(たまには説明しよう！)

克蘭とは、ギルドに所属する者同士で作った小規模〜大規模の身内組織

志を同じくする者同士や、気の合う者同士で集まったコミュニティの様なものである！

M M O R P G のギルド的なものである！

まだ伝わらんか！「M M O R P G ギルド」等の検索ワードで自分で調べろ！！！！
以上！

・克蘭『蒼月の騎士団』の新規加入者達の実力を見る為に【始まりの草原】での演習に来たのだが

なぜか、隣接する【ランゴスの森】から突如として興奮状態のランゴスの群れが襲い掛かって来た。

魔物にはランクがあり

一般人でも戦闘経験があれば対処可能な魔物を「コモン級」

ひとり立ち出来る冒険者程度でないと対処の難しい魔物を「ポーン級」

中級クラスの戦闘力をもった者でないと対処出来ない魔物を「ナイト級」

上級クラスでないと対処出来ない魔物を「スタボーン級」

上級クラスが複数集まらないと対処出来ない魔物を「ヤクト級」

騎士団規模で対応に当たらないとならない魔物を「ルーラー級」

それ以上は全て「カラミティ級」
と分類される。

目的としていた【始まりの草原】で遭遇する魔物はコモン級が大半

で時々ポーン級が現れる程度なのだが

ランゴスはナイト級である、新規加入者には荷が勝ちすぎる。

しかも、わし一人で20匹のランゴスを相手取るとなるとスタポーン級の相手となる。

それでも勝てなくは無いのだが、取り乱したひよっ子達を守りながらでは、分が悪いにも程がある

何とか落ち着かせ、隊列を組み直し、撤退の時間を稼がねばならぬのだが…

上級者と言う驕りからくる慢心でわしの獲物である「デストロイ・ハルバード」では無く

クラン内武器庫から持ってきた「グレート・アックス」を装備して来たのが間違いであった。

重さは申し分無いのだが、握りが手に馴染まず、切れ味も悪い重量級の武器である為、素早く動き回るランゴスには当て辛く、当たっても硬い甲殻のせいだ

致命傷を与えられないでいる。

整備費用をケチって命を落とすなど笑い話にもならぬ…しかし、前途あるひよっ子共を見捨てるわけにもいかぬ…

冒険者となった時から「死の覚悟」は出来ておるが、まさか【始まりの草原】で散る事になるうとは

わしも初心者と変わらぬひよっ子だったと言う事か…

- - 悩み中のアキレス君 - -

・・・もしかして、小野サン必死じゃね？

うん、どう見ても必死。

周りの奴らも手伝ってやれよなあ…

使えん野郎共だ。

仕方ない、超キモイけども手伝ってやるか…

素手じゃ無ければ我慢出来るラインだ、小野サンに何か武器借りよ
つと。

俺って優しいなあ、困ってる人を見るとつい助けたくなっちゃうん
だよなあ

（自己中ダメ人間なアキレス君は自分のせいでランゴスが凶暴化し
てる事は覚えてません。）

木陰から飛び出し、駆け足で小野サンに接近！

ここで対人スキル『奥ゆかしい性格』発動！！！

「加勢する…武器を…」

俺の照れ屋さん！こんな片言で通じたかな？心配だなあ。

ってか、小野サン何に驚いてるんでしょ？

片言っぷりに！？

「あ！？ああ…スマン助かる。」

手持ちの武器はグレート・アックスしかないが、使えるか？」

伝わっては居た様だ…

ってか、唯一の武器を貸すって良い根性してますなあ。

手渡されたグレート・アックスを持つてみると…

か！軽い！！！流石はグレートなアックスだ！さぞかし高いんで
しょうなあ。

などと脳内で感想を述べながら、問題無くぶん回せると伝える。

「問題無い…」

それを確認して小野サンは

「わしは隊列を組み直して仲間を撤退させる、その間だけ時間を稼いでくれれば十分だ。

無論、状況が悪ければ逃げてくれても構わんが、ギルドに応援要請だけでもしてくれれば助かる。」

と言つて来た。

潔いね、武士だね、小野サン。

俺も大和の漢、武士の心を持つ者、見捨てたりなんかしませんよ、蜂さん弱いし。

「任せておけ。」

自信満々で答える俺って格好良くね？

今の俺、輝いてね？

まあ、今からもっと輝くけどね！シャイニング俺！俺様無双の始まりだ！！！！

小野サンの斧をぶん回してみる、軌道上に居た3匹が千切れ飛んだ。相変わらず柔らけえなあ、そんなんで体を維持出来るのか？って柔らかさですなあ。

続いて、叩き付けから打ち上げのコンボ、地面をドッカンドッカン叩いてみる。

地面がエグれた…何この斧…グレート過ぎるでしょ…

何となく振り下ろしてみたただけなので、蜂さんには当たらなかったのだが

エグれた地面から飛び散った土やら石やらが当たる度に蜂さんが弾け飛ぶ。

何これ、ちょっと楽しい。テンション上がってキター！！！！

オラが畑は甘くねえぞお、近付くと怪我すつぞお♪

しばらくグレートな斧で大地を耕していると、蜂さんが残り1匹になっただ。

最後ぐらいは斧っぽくいつてみますか！

ダイナミック薪割り！！！！

軽くジャンプしてから振り下ろし、今度は地面に当たる前に寸止め。

オラが畑をやると、土やら石やら飛び散って危ないので自重しました。

さっき散々やったから飽きたって説も有力ですが。

あれ？ってかさっきのジャンプ、異様に高くなかった…？

興奮して気付かなかったけど、5メートルぐらい飛んでたような…

怖っ！興奮って怖っ！あれが噂に聞く火事場の馬鹿力かぁ。

何とも珍しい体験をしたもんだ。

…再び小野サン（斧のオッサン略して小野サン）…

何とも、締まらぬ最後ではあるが、せめて全員逃がしきってみせよう！

と覚悟を決め必死に「早く逃げんか！」と叫びながら奮闘していると突如わしの真横から声が掛けられた。

「加勢する…武器を…」

これには本当に驚かされた。

近付いてくる姿も見えず、気配すら感じられぬ間に真横に接近されていったのだ。

一瞬驚きで思考が止まったが、長年の戦闘経験のおかげで直ぐに冷静さを取り戻し思考を巡らせる。

わしに気付かれずにここまで距離を詰めれる実力、かなりのモノだ。これ程の実力者が加勢してくれば全員生存も夢では無い。

唯一の武器であるグレート・アックスを手放すのは大きな賭けにはなるが

この人物に時間稼ぎを任せ、わしが隊列を組み直し撤退するのが一番の策に思える。

しかし、何故武器も防具も身に付けて居らぬのだろうか？

まあ、今はそんな事を考えても仕方が無い。

「あ！？ああ…スマン助かる。

手持ちの武器はグレート・アックスしかないが、使えるか？」

グレート・アックスを受け取った男は、暫く感触を確かめると

「問題無い…」

と落ち着き払った様子で呟いた。

重装備で戦うような体格には見えぬのだが、こつも落ち着き払った様子で言われると

心配無いように思えてしまう。

だが、慣れぬ武器での戦闘の難しさは今さつき十分に味わったわしは関係の無い者に危険を負わせる後ろめたさもあり

「わしは隊列を組み直して仲間を撤退させる、その間だけ時間を稼いでくれれば十分だ。

無論、状況が悪ければ逃げてくれても構わんが、ギルドに応援要請だけでもしてくれれば助かる。」

と、わしらを見捨てて逃げても怨まないと伝えておいた。
しかし、男は燃える様な志と信念を瞳に宿し

「任せておけ。」

と、力強く言い放ち、敵へと向かって行った。

そして、それから更に驚きの連続であった。

重量級の武器であるはずのグレート・アックスを目にも留まらぬ速さで横薙ぎに一閃

一瞬で3匹ものランゴスを挽肉に変えたかと思うと

ある程度固まった位置に集まっているランゴスの群れの中心地をグレート・アックスで叩きつけ

飛散する飛礫で一度に複数のランゴスを爆ぜ飛ばして見せた。

それを数回繰り返すだけで、20匹も居たはずのランゴスの群れが残り1匹になっていた。

そして、最後の1匹には天高く跳び上がったの斬り落とし

正に一刀両断、斬られた事にも気付かず飛び続けようとするランゴスが中心から真っ二つに別れ

大地に堕ちた。

『薙ぎ・一閃』『爆飛弾』『天翔断』どれも、伝説級の闘士達が生涯をかけて編み出した奥義

それを、この若さで幾つも身に付けるとは…

とんでもない人物に助けられたようだ…

- - その後のアキレス君 - -

いやあ、人助けってするもんだねえ

依頼の品は皆で剥ぎ取ってくれて綺麗にしてから渡してくれるし
装備無いの... って言ったら動きやすい軽装の鎧一式とグレートなア
ツクスくれるし

お礼って事でお金もくれるし

依頼達成でギヤラも出るし

ウツハウハですなあ、笑いが止まりませんわ。

まあ、「家のクランに入らんか!？」って何かよく解らん勧誘は受
けたが

クランって何かの宗教とかだったら怖いし断った。

さて、纏まったお金も手に入ったし、小うるさい占い師の家ともお
さらばだ!

最初に出合った全身鎧の人に見つかっても面倒そうだし
とっとこの街からトンスラするぜい!!!!

あ、そうそう、話は戻るけど…（後書き）

【三日三晩で一般常識覚えまSHOW】には

クランやら、魔物の種類とランク、ギルドでの常識なども含まれています

ダメ人間なアキレスは覚えた尻から忘れていきます。

でも、一般人として生きる為の最低限の知識だけは覚えておくようです。

主に、お金と、食べ物と、寝泊り、に關してだけです…

あと、題名と荒筋はとりあえず暫定って事で

こんな愚作をお気に入り登録して下さってる方々には申し訳ないですが

なんせ一話目の題でお分かりの通り、続ける予定も無かったものだからある程度、方向性が定まるまで題名も荒筋も決めようが無い状況だったりします。

急に題が変わって混乱する事とは思いますが、何卒ご理解頂きたいです。

後、お手数ですが「誤字・脱字」など教えて頂ければ恥を晒し続けますに済むので

とても嬉しいです。

極力直すようにしますので、宜しくお願い致します。

会話や、設定の矛盾点につきましては、生温い目でスルーして頂ければ幸いです。

矛盾を直してる内に更に混乱する事必至ですので…

毎度毎度こんなウダウダで申し訳御座いますん。

続ける為に話を広げたら、余計に続かなくなって来たよ!?(前書き)

って、わけです。

どうしましょ?そろそろ「アキレスの旅はまだまだ続く…」

って感じで終わるときましょうか…

続ける為に話を広げたら、余計に続かなくなって来たよ!?

さて、街を出て三日経ちました。

ここはどこでしょう…?

道具屋のオツチャンに旅に必要な一式を揃えて貰って購入して
地図を片手に意気揚々と次の街を目指したわけですが
三日経って気付いた! 地図の見方が解りません!!!
で、ここはどこでしょう…?

木々も疎らな岩山の中腹、碌に舗装もされてない道、頂上は暗雲に
隠れて見えません。

地図の絵的には左下の方に描かれてる山っぽい。

何て名前かは読めんの無視。

で、出発地点は地図の真ん中の下に書かれてる【あれすときょうわ
こく?】の【しゅとあれすと?】

って所らしい、まだ文字がよくわからないので読み間違いかもしれん
が…

そんな感じの名前の所から、道なりに歩いてきたわけだ。

ここで、おかしい点が一つ

道なりに歩けば、この山に来る前に村が一つあるはずなのだ。

影も形も無かったけどね!

まさかベタベタなミス…? 地図の上下が逆パターンか!?

うん、それは無い。

上下逆に文字を書いている地図なんて有り得ん。

あったとしたら、製作者の悪意の塊だろう。

まあ、いいかあゝ

この山、かなり標高高いし、雲の下ぐらいから周り見渡せば何か見
えるだろ。

三日間歩いてて気付いたけど、俺の体力は大幅に上方修正されてるらしい

全然疲れまへん、理由は知らん。

でも、疲れないってのは良い事だ。

サクッと登って目視可能な村でも探そう。

ふいふ、着きましたよ暗雲一步手前まで

さて、見渡しますか

・・・

うん、道しか無いね。

地図の嘔吐き

やっぱり村なんて無えじゃんよ

何十年前の地図やねん

仕方ない、反対側に周ってみるかあ。とトボトボ移動再開。

うん、道しか無いね！

後、そろそろ無視し続けるのもキツイ現実を受け入れようか迷い中。

『立ち去れ…此処ハ我等ノ縄張りダ…』

うん、煩い。

いい加減、スルーも限界の様だ。

「別に縄張りを侵しに来たわけでは無いから安心しろ。」

『デハ、早々ニ立ち去レ。』

何てアウエーな対応なんでしょ…

そして、俺の対人スキル『奥ゆかしい性格』が発動されないのは何故だろう？

姿が見えないからかな？

「立ち去りたいのは山々だが、目的の村が見つからんなのでな。」

何でこんな偉そうな口調かって？

舐められたら、即刻追いつ出されそうでしょ？

『村力：アレハ良ク場所ヲ移ス。

今ハ向ウノ森ニ在ル。』

向うの森の中か…あのモクモクと煙の上がつてる所かな？

カマドとかの煙かね？

「あの煙の上がつてる所辺りか？」

『ソウダ、（コムドウーラ）ニデモ、襲ワレテイルノダロウ。』

そうか、カマドの煙じゃ無くて（コムドウーラ）とやらの襲われてる煙なのか…

って、ヤバくね？

俺の食料そろそろ無くなりそうなんですけど！
あの村で補給しないと餓死確定なんですけど！

「早く助けに行かねば！！！」

俺の食料をね！

全力疾走で煙の立ち上る場所へと急いだ。

『我等ノ声ヲ聞イテモ動ジヌトハ、変ワツタ人ノ子ダ…』

暗雲の先、岩山の頂上の方からどこか楽しそうな声が静かに響いた。

続ける為に話を広げたら、余計に続かなくなって来たよ!?(後書き)

どう弄ったら面白くなるんですかね?

面白くなる要素が一切見当たりません!

誰か助けて、へるぷみー。

前向きに、健全に。(前書き)

お題の通り、これからは真面目な人間になろうと思います。
拙い文章ではありますが、お楽しみください。

前向きに、健全に。

怒声、罵声、悲鳴

様々な声が聞こえ始めた。

森の木々の間を縫うように全力疾走する。

都会とは言えないまでも、野山を駆け回る様な生活とは無縁で育ったとは到底思えないようなスピードで駆け抜ける。

「間に合ってくれよ…」

木々の間から村が見え始めた。

多少の火災や倒壊は見受けられるものの、まだ壊滅という様子では無いようだ。

しかし、よく考えれば喧嘩も碌にした事が無い俺に何が出来るのだろうか？

今まで遭遇したモンスターは弱かったから良かったものの

(コムドウーラ)とやらもそうであるとは限らない。

むしろ、村を襲うようなモンスターが弱いわけが無い。

少し冷静になればすぐに解る事だ…

何をしに来たんだろう…

しかし、ここまで来たのにそのまま引き返すのも締まらないのでとりあえず、様子だけでも見てみようと思い

村の手前の木に身を隠し覗き見てみる。

ん？あの大きめなトカゲが(コムドウーラ)か？

口から火球を吐いてはいるが、何か見覚えがあるような無いような…
つてか、そんなに素早くも無いし、背後に回って背中に乗ったら勝ちじゃね？

それに俺、爬虫類とか結構好きだし怖く無いからね。

この村の人達は爬虫類嫌いなのかしら…？

距離を取って、木製の槍で牽制してるようだけど
それって火球の的にしかなりませんよ！

何とかなりそうだし、お手伝いしてみますか。

あわよくば、またウツハウハ出来るかもしれないしね！

く村の少年タウラく

父ちゃんには、母ちゃんと逃げろって言われたけど
オレだつて村の戦士の一人なんだ！

村が襲われてるのに、自分だけ逃げるなんて出来るわけない！

三日前に戦士の試練を乗り越えて、戦士の槍だつて手に入れたんだ！
戦う力の無い人達を守るって決めたんだ！

（コムドウーラ）が相手だつて絶対負けない！

オレは大戦士様にだつて負けない様な立派な戦士になるって決めた
んだから！！！！

く村の戦士長アモスく

クソツ！槍がまるで通らん！

何度となく戦い、その度に一人、また一人と村の戦士が倒されて行く
村を移せども、移せども、臭いを嗅ぎ付け襲い来る（コムドウーラ）
もう我慢の限界だ！

例えこの命果てようとも、この日この場所で必ず貴様を葬り去って

やるぞ！

「くらえ！」

・ズドンッ！！！！・

全身全霊を込めた槍の一突き、流石のヤツも無傷とは行かなかったようだな

獰猛な牙を覗かせる強靱な顎に槍が食い込んだのを確認すると同時に

「一斉にかかれ！！！」

俺の号令と共に、勇敢な戦士達が槍を手に（コムドウーラ）に襲い掛かる。

・グンッ！ブォォン！！！！・

突如、槍を突き込んだ姿勢のまま俺の体が宙を舞った。

そのまま、仲間達にぶち当たり全員吹き飛ばされる。

何と言う膂力だ…

首の力だけで、俺を持ち上げ仲間ごと弾き飛ばすとは…

しかも、今の攻撃で俺の戦士の槍が中程から折れてしまったようだ
ここまで戦い抜いた五人の仲間の戦士の内、三人が今の衝撃で戦闘
不能に陥った。

残りは俺を合わせて三人、しかも俺の武器は既に使い物にならなくな
ってしまった。

しかし、ここで引くわけにもいかん。

折れた戦士の槍を投げ捨て、腰に挿した鉈に持ち替え構えをとる。

ヤツの顎の隙間から炎が溢れ始めた

再びファイアブレスを仕掛けてくるようだ

一塊になれば、恰好の的になってしまう。

急いで散開し三方から一斉に攻撃を仕掛けた。

例え一人が犠牲になろうとも、残りの二人で必ずその首を落としてみせる！

覚悟と共に各々が最高の一撃を叩き込もうと距離を詰めたその時ヤツが思いがけない行動に出た。

火球を自らの眼前に吐いたのだ

立ち上る煙と炎、飛び散る飛礫。

予想外の出来事に全員が一瞬動きを止めてしまった。
その瞬間…

・ブウォン！バチンツ！ドンツ！ドンツ！！！！・

胴体を180度旋回させ、勢いをつけた尾で三人共に薙ぎ払われた。その衝撃は凄まじく、残った二人の仲間も戦闘不能に陥り、俺もかなりの深手を負わされ意識が朦朧とし始めた。

「ここまでか…」

ノッシノッシと身体をくねらせる様にこちらに近付く（コムドウーラ）

最早、抵抗する余力も尽き果て敗北を受け入れたその時

・ビュン！ザクツ！！！！・

俺と（コムドウーラ）の間に突き立つ戦士の槍。

しかし、もう戦える戦士は残って居ないはずだが…

「父ちゃんに近付くな！」

戦士長アモスが息子、戦士タウラがお前の相手になる……！」

馬鹿な！？あれ程きつく逃げると言ったのに戻って来るとは……
何とかもう一度逃がさなくては……

既に限界を超えた身体に鞭打ち、何とか立ち上がると

「馬鹿者！お前では戦いにすらならんっ
早く安全な所まで逃げるんだ……！」

と言い、地面に突き立った槍を引き抜き息子を庇う位置に立った。
だが、限界を超えた体は思う様に動かず、突進すら避ける事適わず
弾き飛ばされ
再び無様に崩れ落ちた。

「逃げろ……タウラ……」

そして、そのまま意識は闇の中に落ちて行っただけ……

前向きに、健全に。(後書き)

読んで頂き、有難う御座います。

自分で読み直しても、失笑を禁じ得ない。（前書き）

真面目な人間にはなれない様です！

真剣にやればやる程、三流のギャグに見えてくる…不思議！

後、真剣に書くと文章力と表現力の無さが浮き彫りになるって学んだよ！

皆も気を付けようね！

自分で読み直しても、失笑を禁じ得ない。

「村の少年戦士タウラ」

父ちゃんですら敵わないなんて…
怖い…逃げ出したい…

でも、父ちゃんを見捨てて逃げる事なんて出来ない。
何より、そんな事をしてしまったら先祖の英霊と大戦士様に顔向け出来なくなってしまう。

そして、二度と戦士に戻れない。
それはきっと死よりも恐ろしい事だ…

震える手に槍を持ち、恐怖で固まった体を叱咤し、僅かに残った戦士の誇りを奮い立たせ
槍の切先を相手に向けて構えを取る。

「戦士タウラ、推して参る！」

一気に距離を詰め、渾身の一突きを放つ
コムドウーラの硬い鱗に弾かれ傷一つ付ける事も出来ない。

そんな事は百も承知だ。
オレには村の大人の戦士の様な体格も力も無い、真っ向勝負では毛筋程の傷を付ける事すら適わない。
ならば、どうするか？

オレが他の戦士達より優れているのはスピード、この一点のみだろ
う。

ならば、スピードで攪乱し隙を突くこれ以外の手は無いだろう。
だから、止まってはダメだ、手を休めてもダメだ。

只管動き回り、攻撃し続け、相手に攻撃の隙を与えない。

我武者羅に動き、突く、ただそれだけを繰り返す。

有効打など皆無、しかし攻撃の初動が見て取れれば、その攻撃の起点となる顎を、足を、首を、尾を、突きによって牽制する。

お互いにダメージは皆無、つまりは体力と精神力の削り合い。

先に痺れを切らしたのはコムドゥーラの方だった。

自分に傷すら付ける事も出来ない弱者にチクチクと突付かれ、攻撃の邪魔をされ、我慢の限界を超えたのだろう。

怒りに任せた咆哮を上げると、牽制をものともせずファイアーブレスを溜めだした。

今までの比にならない熱量が顎の間から漏れ出す。

そうとう逆鱗に触れた様だ、倒した後喰う事を度外視した、消し炭も残らない程の渾身のファイアーブレス。

前足を持ち上げ、大きく仰け反り、今まさにその顎から凄まじい熱量を持った火球が解き放たれんとしている。

振り下ろされる頭、大きく開けた顎から灼熱の火球が放たれる、それと同時に感じる激痛。

何が起きたのかも理解出来ず、激痛に耐えかね悲鳴を撒き散らすコムドゥーラ。

その喉元からは槍の柄が生えていた。

「やった…

オレ、勝った…ぞ…。」

コムドゥーラが仰け反った瞬間に、素早く腹下に潜り込み、大地に槍を固定して構え

頭を振り下ろす相手の力を利用した必殺のカウンターが見事に決まったのだった。

そして、勝鬨を上げると同時に気力と体力の限界を迎え、タウラも気を失った…

未だ悲鳴を上げ、苦痛にのた打ち回るコムドウラの目に、より強い怒りの炎が燃え盛っている事にも気付かずに…

自分で読み直しても、失笑を禁じ得ない。（後書き）

いくら読み直しても、今の状況が全く伝わってこない…

今ってどんな状況？誰か私に池上アキラさん風に説明して下さい。

後、主人公がどうなってるかも教えて下さい。

自分で書いてるのに、謎と不思議がいっぱい！

推参って良い意味では無いよ？（前書き）

【今話のコンセプト】

とりあえず、面倒な戦闘を終了させてしまおう。

推参って良い意味では無いよ？

皆のピンチに俺、推参！！！！

誰かは知らんが、オッサンも少年も頑張った！
止めは俺に任せろい。

下顎に風穴を開けられたコムドウーラが怒りを露に再び戦闘態勢に入ったところで

背後からコッソリ近付く。

今だ！！！！ってな感じで飛び掛る、そして背中に着地。
マウント取ってしまえばこっちのもんだろ。

急に背中に飛び乗られ、驚きで一瞬動きを止めたが、次の瞬間には何とか振り落とそうと暴れだす。
ちよっとしたロデオ気分ですね。

難なく跨ったまま、取り合えず槍を弾き返してた鱗が邪魔そうなので剥がしてみる。

-ぶちっ ペキ！ぶちっ ペキ！-

面白いほど剥がれますなあ、単純作業が大好きな俺はちよっと夢中になって剥がしまくってしまった。

頭頂部から背中にかけての鱗が無くなってしまいました、ご愁傷様です。

後、剥がした鱗がペキペキと砕けるんですが、剥がれた瞬間に強度を失うのかね？

まあ、どうでもいいけどね。

鱗を塗り取られて怒ったのか、火球を吐き出そうとしたすコムドウ

ーラ

背中俺には当たらんが、怒りに任せて乱射されたら周りの被害は相当なものになってしまう。

急いで腕を顎に回し口が開かない様締め付ける。

ワニとかも口を閉じる力は凄いけど、開ける力は弱いらしいし何とかなんだろ。

結果、無事口は開かず事無きをえたと思ったが、下顎の穴から炎噴出。

ジェット噴射の如く噴出した勢いで90度近く体が起き上がるコムドウーラ。

もちろん俺落下。

コムドウーラ無事着地。

尻尾ビンタ炸裂！

痛い…ちよつと涙目になる。

ム力ついたので、仕返しに尻尾にローキックをお見舞いしておく。

- ヒュン！ザンツ！ -

あ、尻尾の先が切れた。

大きくてもトカゲなんですね、トカゲの尻尾きりってやつか。

後、何か見覚えあると思ってたらアレだ、コモドラゴンそっくりなんだコイツ。

名前も似てるっちゃあ似てるしね。

って事は牙に毒があるかも知れんので気を付けよう。

初めから噛まれる気なんてサラサラ無いけどね。

ん？コモドラゴンって尻尾切れねえじゃん。

まあ、どうでもいいさね。所詮ファンタジー、常識なんて無いようなもんだろ。

さてさて、予定外に背中から落とされてしまったが、邪魔つけな鱗も十分に剥がしたし

そろそろ止めといきますか！

このグレートなアックスの錆にしてやりましょう。

つてなわけで、背中に背負っていたグレート・アックスを手に持ち、肩に担ぎなおす。

倒し方なんて解らるので、とりあえず首を刎ねる事に決定。

心臓の位置なんてわからんし、頭は頭蓋骨で硬そうだし

あっちこっち斬り付けて、死んだと思ったら実は生きてて後ろから襲われるパターンとか嫌過ぎるしね。

また火球を吐かれても厄介なので、ダッシュで近付いて一気に振り落とす。

少し遅れて、ゴトリと音を立て転がる首、ナンマイダー。

ん？生き物を殺したのに軽すぎないかって？

意思の疎通も出来ん上に襲いかかってくるヤツなんて蚊と一緒に！倫理的価値観なんて、こっちに來てから一週間もしない内にどっかに置き忘れてきたわい。

よし、死亡も確認できた事だし、回りに転がってる人達を起こし直すかね。

見た感じ、尻尾ビンタとタックルぐらいしか食らってなかったし攻撃しすぎて疲れて気絶してるだけだよ。

まあ、倒れるほど攻撃し続ける根性は凄いいけどね

きっとココの人達は戦争に駆り出されて死ぬ事になったら、死因は戦死では無く過労死だろう

無駄に頑張り屋さんな方々め。

とっとと起こして、コムドウーラを「俺」が倒した事をアピールして、お礼に食料分けて貰わなきゃね！

そして、出来れば過剰に感謝されてウツハウハしたいね！

推参って良い意味では無いよ？（後書き）

【次話の目標コンセプト】

とりあえず、面倒な村からとっとと出してしまう。

誰も待つて無くても、お待たせしました。（前書き）

実は活動報告など嗜ませて頂いているのですが

そこで取るに足らない悩みなどを吐いていたんです。

そして、自分なりの答えが出ました！

「クオリティやら何やらなぞ、最初から無いのだから

いっちょまえに悩むまでも無い！

気分が乗った時にグダグダ書けばいいじゃない。」

つてわけで、良く言えば再開、悪く言えばハラスメント続行

これからも、低クオリティ・低更新速度でお願いします。

暇を極めし方々、もし宜しければこれからもお付き合いください。

誰も待つて無くても、お待たせしました。

予定通り感謝されまくりましたよ。

少年とか、マツチヨなオッサン達にキラッキラの目で見つめられましたよ。

正直逃げ出したかったですよ。

まあ、目的の食料調達も出来たので多少の事には目を瞑りましょう。多少の事にはね…

ただし！『大戦士アキレス様』って何ですか！？

新手的嫌がらせですか！？

弱ったトカゲを相手に美味しいところ取りした報いですか！？

大戦士とか恥ずかし過ぎるんですが…

何かこの村『戦士の村アクトゥルス』の昔の偉い人の称号らしい。

村を守る為に『ナイトクラス？』の魔物100体と、それらを率いる『スタボークラス？』の魔物1体にガチで喧嘩売って勝っちゃった戦闘狂らしいですよ。

んで、コムドウーラは『スタボークラス？』らしいです。

何の事が意味ワカンネ。

まあ、貰うモン貰ったし（要らんモンも付いてきたが）とつとと街を目指して旅立ちますかね。

称号なんて名乗らなけりゃばれないしね！

しかも、200%嫌味の称号だしね！

ついでに、ボロッボロの槍もくれるって言われたけど、丁寧にお断りしました。

嫌味の上乗せか！？荷物にしかならんゴミは要らん！

さあ！俺の明日へ向かって出発だ！！！！

…ん？何か変なのが空を飛んでこっちに近付いてくるな…

「ここまでの流れを「多少」詳しく」

「長老様、我々は気を失っていたので状況が掴めぬのですが…
このコムドウーラの首の太刀筋、スタボーン級のコムドウーラの首
をこれほど見事に切り落とす事など人の身で可能なのでしょうか？」

戦士長であるアモスがまだ戦闘のダメージが癒え切らず、少しふら
付きながら長老に疑問をぶつけた。

「うむ、信じられぬじやろうがワシがこの目で確認しておった。」

長老は完結に事実を告げたが、更に疑問が浮かんだアモスは続けて
疑問をぶつける。

「では、あの旅人は神剣か魔剣かの使い手なのですか？
見た所、ありふれたグレートアックスしか持って居ないようですが
？」

長老はそれに対しても完結に事実を告げたが、少し興奮気味に力を
込めて答えた。

「その、『ありふれたグレートアックス』で音すら置き去りにして切り落としたのじゃよ…」

剛尾とまで表現される尻尾に至っては、足刀で一閃じゃ。

大戦士様ですら成し得ぬ神業じゃよ…。」

暫くの間その答えに啞然としていたアモスだが、今一度コムドウラの死骸とアキレスを一瞥し納得したのか

「大戦士アーク様の再来の様な方ですね…

これは、村をあげてお礼をせねばいけませんな。」

と、柔らかな表情で告げた。

【ここからは時々、副音声でお送りします】

【『内は副音声としてお読み下さい』】

「ワシはこの戦士の村アクトウルスの長をしておりますトーラと申します。

先ずは村の危機を救って頂き、真に有難う御座いました。

失礼で無ければ、村の恩人である貴方様のお名前をお伺いしたいのですが、かまいませんか？」

と、長を名乗る小柄で少し腰の曲がった、白髪に白髭のトーラさんとやらの語りかけられたアキレスは

「アキレス…」

『あ、俺はヒトトセ・アキレスです。』

と、本人はわりと爽やかに答えようとしたが、恥ずかしがり屋スキルが発動し失敗した。

「アキレス殿とおっしゃるのですか、とても力強い響きのお名前ですな。」

では、アキレス殿
お急ぎの旅でなければ、今夜にでも歓迎と感謝の宴を開かせて頂こうかと思っておるのですが
いかがですか？」

年の功か性格か、アキレスの失礼とも取られ兼ねない短か過ぎる返答を氣にした様子も無く、トーラが宴を提案したのだが
例の如く返答は

「俺…に、宴は…不要。」

『大した事もしていない俺の為に、わざわざ宴は必要無いですよ。
お気遣いは不要って事でお願いします。』

恐ろしく省略された返答ではあるが、「宴は必要無い」という部分だけは辛うじて伝わった。

「謙虚な辞退」か「真っ向からの拒否」かは別として…

「フム、戦士に気の緩みは禁物。」

宴などで浮ついてはならぬ、という気構えがおりなのですな…

いやはや、これは失礼致しました。

ならば、せめてものお礼に旅に必要な物はこちらでご用意させていただきますしょう。

それと、この村での最高の称号と大戦士の槍もお贈りしましょう。」

今度は明らかに失礼な返答であったが、どう勘違いしたのか好意的に受け止められ

当初の目的の食料なども無料で手に入った。

後、わけの解らないモノも二点ほど付いて来た。

そして、いつも通り「なんやかんやあって」村を出ようとしたその時遠く空から翼で風を切る音を響かせながら、ナニモノかが近付いてきた。

「飛鎧獣…」

絶望により蒼白となり表情を失ったトーラが力無くそう呟いた。これが、初めての【カラミティ級】との遭遇であった。

誰も待つて無くても、お待たせしました。（後書き）

今回はいつもにも増して「勢い」で投稿させて頂いたの
読み返し無し、今までの話を私自身が忘れてしまった、等の理由で
誤字・脱字・誤文・脱文が多々あるかと思えます。
だがしかし！

いつもの事なのでお気になさらずお願いします…

評価ポイントとか頂いちゃいましたよ！（前書き）

テンション上がりますなあ！

勢いに任せてやっちゃったぜ！

評価ポイントとか頂いちゃいましたよ！

いやあ、空の旅って快適ですねえ。

少々肌寒い感じはしますが、辺り一面を見渡しながら風を感じるってのは

何とも解放的で素晴らしい！

されど、一つ不満点を上げるとすれば、シートが硬い。

乗り心地はイマイチと言わざるを得ませんなあ。

『人様ノ背ニ乗ツカッテオイテ、ヨクモマア好キ勝手ヲ言ウモノダナ。』

ソレ程不満ナラ、振り落トシテヤツテモ良イノダゾ？』

嘘ウソ、ゴメン不満なんて御座いませんよ？

ってか、心の声に突っ込んでいけませんよ？

【飛鎧獣】って呼ばれてるらしいナマモノの背に乗って空の旅を満喫中のアキレスです。

ちよつと前に登った山の山頂に生息してるカラミティ級？の種族らしいですよ奥さん。

俺のあまりに普通の対応に興味を持ったらしく【戦士の村】まで会いに来たそうで…

その時の【戦士の村】のパニックっぷりは凄かった！

この世の終わりでも来たのかって勢いでした。

まあ、それはさて置き

このナマモノの名前はラボラスって言うらしい。

んで、ラボラスの見た目は…

あえて言うなら犬っぽい

岩と鉄の中間ぐらいの見た目と質感の外殻を身に纏ってて

台風の日でも飛べそうな強靱な翼が生えてて

耳の後ろ辺りから湾曲しながら前に突き出てる角が生えてて

全長5メートル程の体躯を持つてる。

って事を除けば、超凶暴になった黒いゴールデンレトリバーっぽい。

あ、黒い時点でゴールデンじゃ無えじゃん。

全然どうでもいいし興味も無えけども。

んで、話してみると結構話の解るヤツで、現在は次の街までタクって貰ってます。

あ、タクシーの代わりって意味ね。

まあ、対価を払う気は無いので無賃乗車ですがね！

『少しハ払アウト言ウ素振りグライ見セタラドウダ…』

「ええ、一応聞くけど、対価は何かいいのよ？」

『血肉ヲ所望スル。』

「却下。」

そんなこんなで楽しく会話なんぞをしつつ、次の街まで意気揚々と向かったのさ！

それがまさか、あんな悲劇に見舞われる事になるなんて…
つづく！

評価ポイントとか頂いちゃいましたよ！（後書き）

まだまだテンション上がりっぱなしですよ！

まあ、その影響で話が面白くなったりはしないんですけどねえ…

短い文章をあえて区切って話数を稼いでみる（前書き）

覚めやらぬテンションを伝えるべく

話数を水増しして連続投稿してみる。

通販の、更にもう一個お付けします！的な？

短い文章をあえて区切って話数を稼いでみる

ハイ！悲劇の真つ最中のアキレスです、宜しくどうぞ！

話は前話に遡って直ぐに戻ってくる、意味は無い。

前話に遡るって言いたかったただ、長編っぽくてカッコイイから。

まあ、こんな下らない与太話を

冷静に状況を推測しながらご覧頂いているかは疑問ではあるが
今に至るまでの流れを少し思い出して、考えて見て欲しい…

…思い出して考えるのが面倒なのでぶっちゃけると。

今、俺、絶賛拘束され中！

ラボラスに乗って街に乗り込めば当然の結果ですよ〜
しかも、ラボラスは

『面倒ナ事ニナツタナ、我ハ帰ラセテ貰オウ
後ハオ主デ何トカセヨ。』

デハ、縁ガ有レバマタ合オウ。』

とか言い残して帰りやがりましたよ？

ラボラスって脅威が去ってからの拘束の早さは目を見張るモノがあった。

正に一瞬で御用と相成ったわけですよ。

ラボラスの奴め…覚えてるよ…

いつかハバネロにでも漬け込んだ血肉をご馳走してやる…

後、ラボラスって何気にラスボスって読み間違いそうになりますよね。

どうでもいいですか。そうですか。

くグラシヤの街の警備兵長く

今日は厄日だ…

朝から妻に連日帰りが遅いと文句を言われ
巡回やら書類整理などに追われ大変であると伝えれば
隣のガイウスさん家の旦那はあなた程遅くないと更に文句を言われ
る始末。

万年平警備兵のガイウスと警備兵長の俺とでは仕事量が違うなんて
当然だろうに…

説き伏せる気も起きず「仕事に行つて来る。」とだけ言い残し詰め
所に向かえば

私の補佐役のシーザーが

「シリウス兵長、またガイウスが巡回中に酒に酔って街中で冒険者
と揉めたと苦情が上がっております。」

と報告してきた。

「またか…」

ため息しか出ないが、腐つていても何も解決しないので

「始末書を書かせた後に、10日間の謹慎…は休みを与えるだけの

結果になりかねんな…

東の森の巡回警備の任に就かせる。」

と指示を出す。

するとシーザーはいつもの飄々とした態度で

「了解致しました。

いつそ東の森で大怪我でもしてくれれば、良い薬になるんですがねえ。」

と漏らしたので、私はまたため息を一つ吐き

「思っても口にするな…」

と嗜めておいた。

それにしてもガイウスめ…俺に迷惑をかけるのが趣味なのか？

本当に、大怪我でもして警備兵を辞めてはくれないだろうか…

口に出さなければ、思うくらいは許されるだろう…

と思いたい…

そして、いつものように大量の書類整理を済ませ終えれば

とつくに昼休憩の時間も過ぎていて

またため息を一つ吐き、昼食を締め巡回に出ようと思った矢先に

珍しく血相を変えたシーザーが部屋に飛び込んできた。

「シリウス兵長！大変な事態です！」

私はシーザーに先ずは落ち着くように言い、どうしたのかと尋ねると

「落ち着いている場合ではありません！」

南の方角より【飛鎧獣】と思わしき影が一直線にこちらに接近しているのです!」

今日は厄日どころでは無く、人生最後の日だったようだ…

短い文章をあえて区切って話数を稼いでみる（後書き）

やっべ！ロマンティックが止まらねえ！！！！
まだまだ連続投稿で積み掛けるぜい！！！！

【ある意味で】シリウス可愛いよ！シリウス！（前書き）

萌えキャラ登場です！

嘘です！！！！

でも、作者は結構お気に入り。

「ある意味で」シリウス可愛いよ！シリウス！

く絶賛シリウス中く

絶望に打ちひしがれていても、事態は好転しない。

気持ちを切り替える、とまでは言えないながらも私は出来うる限りの事はしよう、と行動に移った。

先ずは櫓に向かい【飛鎧獣】の進路と距離を確認する。最悪でも住民を避難させられるだけの距離があれば良いのだが…

櫓に登り、目視で【飛鎧獣】を確認出来た時点で既に打つ手が無いと悟った。

この距離と相手の速度では、数分とかからずこの街に到達するだろう。

軽く眩暈を覚えるが、警備兵長として何もせずにいる訳にもいくまい…

「総員！南門前にて戦闘配置！！！」

怒鳴るように叫ぶと、私も南門前に向かい急いだ。

疾走する最中、視界の端に一目散に逃げ出しているガイウスが見えたが

連れ戻す気力も起きなかったので、何も見なかったと自分に言い聞かせた。

願わくば、天罰でも下れと心から願いながらも

何とかモチベーションを保ち南門を抜けた自分を褒め称えたい。

南門を抜けると其処には（ガイウス以外）の全員が揃って戦闘配置に就いていた。

我が警備兵団の勇氣と迅速な行動も褒め称えたい。

そして、ガイウスには天罰が下って欲しい、心から。

私も急いで先頭に立ち武器を構えると、目の前に【飛鎧獣】が降り立った。

近くで見ると尚更のプレッシャーと絶望感が身を襲う。

しかし、眼前の【飛鎧獣】は何の行動も起こさない。

恐る恐るではあるが、包囲陣を展開していると

【飛鎧獣】の背中から、一人の男が降り立った。

男は周りを一瞥すると、特に興味も無いと言った風にただ立ち尽くしていたが

男の耳に【飛鎧獣】が顔を寄せ、小さく鳴くとそのまま南の空に飛び去って行った。

それをただ見送る男。

この好機を逃す手は無いと、一斉に飛び掛り男を拘束した。男が【飛鎧獣】を呼び戻すのでは無いかと肝を冷やしたが特に抵抗する素振りも見せずに、大人しく連行されて行く。

【カラムティ級】のモンスターが襲来したと言うのに

何の被害もなく、実にあっけなく事態は収拾してしまった。

俺の絶望感と緊張感は何だったんだろうか…

この疲労と心労を無かった事にして欲しい…

後、天罰は下して欲しい…

【ある意味で】シリウス可愛いよ！シリウス！（後書き）

名前が無い、個性が無い、と

キャラが立たないのが悩みだったので

キャラに生活感を出してみよう！と思い立ちシリウス君が誕生しました。

作者的には大成功ですが、本当の所はどうなのでしょう…

そろそろ失速、もう一踏ん張り！（前書き）

そろそろ栄養が切れました。

栄養をくれた方、本当に有難う御座いました！
久々に画面に張り付いてたので腰が痛い；；

そろそろ失速、もう一踏ん張り！

くずっとシリウスのターンく

取調室で謎の男の取調べをしているのだが…

この男、一切口を開かない。

何を聞いても無言を貫くのみ。

押収した物も、何の変哲もない軽装用のプレートアーマーとグレート・アックス

旅道具一式と手掛かりになる物は一切無い。

ギルドカードすら無い為、身元も氏名も一切不明

かれこれ数時間も無言のまま、ただ静かに座っている。

「これは、骨が折れそうですね。」

シリウス兵長、先にながらせて頂いても構いませんか？」

このタイミングで私を見捨てるかシーザーよ…

「今は取り調べの最中だ、私語は慎みたまえ。」

取調べ相手に舐められてはいけないので、威圧感を出しシーザーを嗜めたのだが

「私が居ても、お役に立てそうに無いので失礼しますね。実の無い残業はしたくありませんので。」

と、言い残し部屋を出て行くシーザー

私には有事の時以外に信用出来る部下は居ないのだろうか…
それとも人望が無いのだろうか…
本気で鬱になりそうに成りながら、更に数時間…

- チュン、チュン、チュン -

小鳥が囀り始めたようだ…
もう朝か…

取調べは一向に進まない
もう帰りたい…

帰ったらまた妻の小言が待ち受けているのだろうか…
やっぱり帰りたくない…

「はああ……今日は本当に厄日だ…」

泥のように眠りたい…
そして、泥になりたい…

「辛い事があれば、その分良い事もある
そんなに気を落とすな。」

突然、謎の男が口を開いた。
急な驚きでつい

「良い事、あるかな？」

と言ってしまった私に

「良い事、あるさ。」

と、彼が優しく答えた。

溢れ出る感動に、全俺が泣いた…

そろそろ失速、もう一踏ん張り！（後書き）

失速感がハンパ無いですなあ。

折角栄養を与えて頂いたのに申し訳無い……

駄文については、今更謝らない！！！！

栄養の残りカス、つまりはウン……言わぬが仏。(前書き)

蛇足の超短編です。

はい、話数稼ぎですが？

栄養の残りカス、つまりはウン……言わぬが仏。

やっべ！

取調室つぽい所に連れて来られてからも

いかにしてラボラスにハバネロ漬けの肉を食わせるか考えてるうちに
先ず、この世界にハバネロがあるのか否かに思考が移って行き

そのまま、取り留めの無い妄想ワールドに突入してたら夜が明けち
やった！

いつの間にやら、目の前には疲れ切った様子の40歳前後の男が座
ってる。

ダークなオーラが溢れ出してますが大丈夫なんでしょうか？
ダメですか、そうですか。

「はああ……今日は本当に厄日だ……」

ため息深っ！どんだけ散々な目にあっただろうか……
流石に励ましの言葉の一つもかけんわけにもいかんだろ。

「辛い事があれば、その分良い事もある
そんなに気を落とすな。」

事情も知らんから、この程度の事しか言えんが、元気出せ！

「良い事、あるかな？」

半泣きのオッサン……

何！？この可哀相な生き物……！！

こっちまで泣きそうな哀愁が漂ってくるんですけど！

「良い事、あるさ。」

泣き崩れるオッサン

溢れ出る哀愁に、全俺が泣いた…

栄養の残りカス、つまりはウン…言わぬが仏。（後書き）

次からは悪乗り控えて話を進めます。

悪乗りを無くすと、この作品そのものが無くなるので控えるだけです…

後、「全米が泣いた」の全米の基準って何なんですかね？

ついでに、感涙では無くスタンディングオベーションなら

「立った」になるんですかね？

まあ、美味しそう。

ステータス…？よし、採用！（前書き）

最近、私の中でVRMMORPGトリップものがブームなので
ステータス君が就職難の最中、無事採用されました。

皆様、なにぶん新人なので至らない所も多々あるとは思いますが
これからのステータス君の成長に期待して暖かく見守ってやると共に
ご指導、ご鞭撻の程、宜しくお願い致します。

ステータス…？よし、採用！

やあ！未だ取り調べ中のアキレスだよ！

全お米がツヤツヤに…もとい

おっさん二人が（俺はまだ永遠の十代だけどねっ）抱き合って泣き崩れる。

と言う、珍妙極まりない事態から取り調べはサクサク進んだ。

まあ、進んだって言っても

氏名 ヒトトセ・アキレス

年齢 19（スイートテンダイアモンドは誰から頂けますか？）

住所 不定（世界の全てが俺の家さ！）

職業 無職（自宅を失った自宅警備員）

あれ？世界の全てが俺の家なら、世界警備員で良くね？

世界警備員って凄そうじゃね？面倒臭くね？やっぱ無職で良くね？と軽く妄想ワールドに転生しかけながらも

氏名・年齢・住所・職業をサクツと伝え「飛鎧獣との関係」については

「タクシー兼リベンジするべき相手」と伝えたと

「良くわからんが、特に問題や悪意は無さそうだし俺が適当な理由をでっち上げておく…。」

と頼り甲斐のある所を見せるシリウス
さっきまでは可哀相なだけのおっさんだったのにね！

そして、シリウスの次の一言が全ての元凶だった…

「無職だからギルドカードを持って無かったのだな。」

ん？ギルドカード？持ってますが何か？

いつカツアゲにあっても良いように大事な物は靴の中に入ってますが？

と、取り出したギルドカードを渡すと

「ん！？どこに隠し持ってたんだ…」

カードを所持してると言う事は職業は冒険者だな

持ち主か否かの確認も含めて内容を見せてもらって構わないかな？」

渡してるんだから勝手に見れば良いのに、と思ったが

わざわざ確認してくれたので、お好きにどうぞとの意味を込め頷いておいた。

しかし、シリウスは困った顔をして

「閲覧許可をだしてくれないと見れんのだが…」

と言い出した。

閲覧許可？出したじゃん、どうぞって頷いたよね？
と困惑していると

「もしかして、ギルドカードの使い方を知らんのか？
簡単に説明するとだな

普通の状態では、表面には所属ギルドと本人の名前
裏面には何も書かれていないだろう？」

と、俺のカードを俺に渡しシリウスが自分のカードを取り出し説明
しだした

「だが、本人がステータスオープンと唱えると
裏面にステータスが表示されるわけだ

本人以外が言っても表示されないの、これで本人確認ができる
更に、情報は随時更新されるので、経歴や罪歴も一目で確認できる
そして、言語や文字が違う相手にも解るように

自動で見る側に伝わりやすい様に表記してくれるって親切設計だ
原理は知らんけどな。」

ふむふむ、こんな板つきれがそんな素敵な物だったとは…

では、ステータスとやらを見て見ましようかね？

裏面を上にして机の上にカードを置きステータスオープンと唱えた
瞬間

最初に目についたものは…

職業：大戦士（笑）

何iiiiiiii!!!!????

ステータス…？よし、採用！（後書き）

最近、話数稼ぎの細切れ更新が癖づいて来た
まあ、昼飯食ったら続き書くのでお許しを
無事に更新出来るかは解りませんがね！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7548t/>

春夏冬って「商い」って読むんじゃ無いの？

2011年12月7日13時01分発行